

2023. 11. 10

**TOYOBO**  
Beyond Horizons

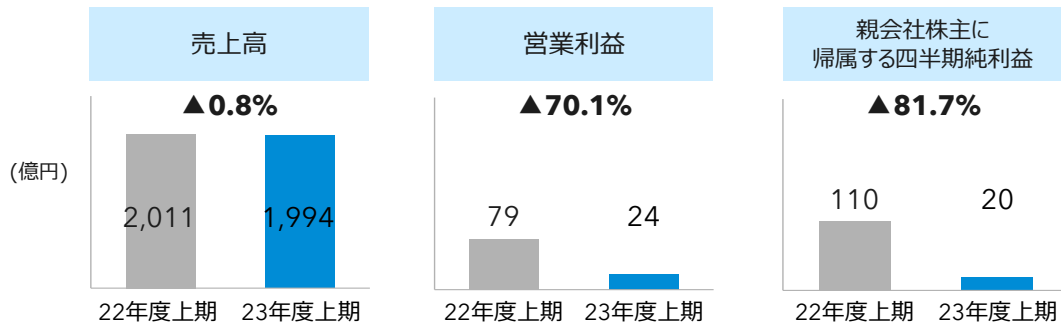
# 2023年度 第2四半期 決算説明

東洋紡株式会社  
代表取締役社長  
竹内 郁夫

みなさま、こんにちは。社長の竹内でございます。平素は皆様方に変にお世話になっております。本日は決算説明会にご参加いただきありがとうございます。

## 第2四半期累計実績

液晶偏光子保護フィルムは販売を伸ばすも、PCR検査用試薬の需要減に加え、包装用フィルムの数量減や新機台立上げ費用計上により、減収減益。四半期純利益は 20 億円



## 2024年3月期通期予想

フィルムの緩やかな需要回復、原燃料価格の高止まり影響を踏まえ、営業利益を 100 億円に下方修正。当期純利益は 10 億円を予想。配当は据え置きを予定

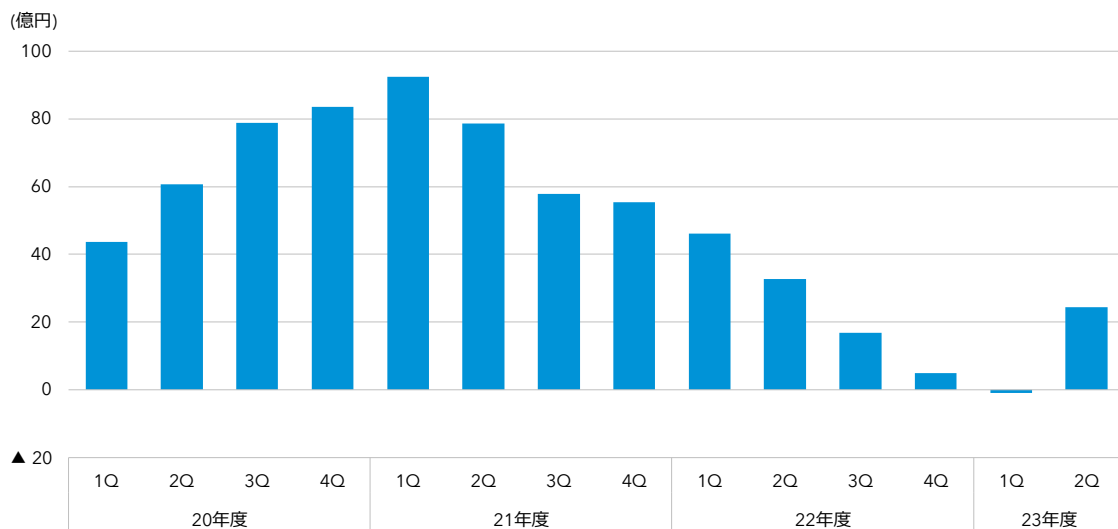
決算のポイントでございます。第2四半期累計実績ですが、昨年度対比で売上高は▲0.8%、営業利益は▲70.1%、親会社株主に帰属する四半期純利益は▲81.7%と、微減収、大幅減益、となりました。

営業利益の増減の内訳といたしまして、まず増益要因としては、液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”の販売が好調でした。一方、減益要因として、PCR検査用試薬の需要が大幅に減少し、また、包装用フィルムの収益の回復が遅れました。包装用フィルムは、市場の在庫調整に時間がかかり数量の回復が遅れたことに加え、新機台の立ち上げ費用を計上しました。更には、全社で、原燃料価格高騰、特に燃料価格高騰の影響が残ったことで、大幅な減益となりました。

通期見通しですが、売上高は当初計画の4,300億円から4,100億円に、営業利益は150億円から100億円に、親会社株主に帰属する当期純利益は40億円から10億円に下方修正いたします。営業利益の下方修正の要因といたしまして、まず、フィルム事業はようやく回復基調となっておりますが、その回復が当初計画対比でやや緩やかであること、そして、原燃料価格が下期にやや下落すると見ていたところが高止まりすること、を織り込んでいます。配当は据え置きを予定しています。

## (参考) 四半期別営業利益推移

TOYOBO



3

先ほどは昨年度対比でご説明しましたが、このスライドでは、四半期単位での営業利益の推移をお示しします。2023年度1Qは営業赤字でしたが、2Qには黒字となり、この上期以降は回復をめざします。

## 23年度上期の事業環境（当初想定との差異）

TOYOBO

セグメント	事業	当初想定（23年度上期）	現状（23年度上期）	
			対想定*	当初想定との差異
フィルム	包装用	流通在庫の調整が段階的に解消	▲	在庫調整の長期化で需要回復遅れ
	工業用	液晶偏光子保護フィルムは需要堅調	○	中国向けの出荷堅調
		MLCCはサプライチェーン全体での在庫調整	-	-
ライフサイエンス	バイオ	PCR検査用試薬の需要大幅減	▲	5類感染症移行により、需要は激減
	メディカル	人工腎臓用中空糸膜は需要堅調	○	堅調に推移
環境・機能材	樹脂・ケミカル	自動車生産台数の回復（半導体不足の解消）	-	-
		電子材料用途（中国・アジア）の需要回復	▲	需要回復遅れ
	環境・ファイバー	VOC回収装置は需要堅調	-	受注は堅調
		不織布マテリアルは競争激化	▲	事業環境の競争激化（衛材、土木）
機能繊維・商事	エアバッグ	自動車生産台数の回復（半導体不足の解消）	-	-
共通		原燃料価格高騰の影響残る	-	-

\*当初想定に対し、○：改善・拡大、-：想定通り、▲：悪化・減少 4

2023年度上期の事業環境について、当初の想定との差異をご説明いたします。

包装用フィルムは、在庫調整が2Qには終わり回復基調となると見ておりましたが、遅れました。

工業用フィルムでは、ディスプレイ関連の業界は厳しい競争環境にありますが、液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”は中国向けを中心に出荷が堅調でした。

PCR検査用試薬については、大幅減と想定しておりましたが、7割減の想定に対し、9割減となりました。

電子材料関連は、中国・アジア向けの出荷が落ち込み、中国景気の回復遅れの影響を受けました。

不織布マテリアルは、競争激化を想定しておりましたが、お客様の業界も非常に苦戦をされていたため、当社も更に厳しい競争環境となりました。

# 決算サマリー | PL

**TOYOBO**

(億円)

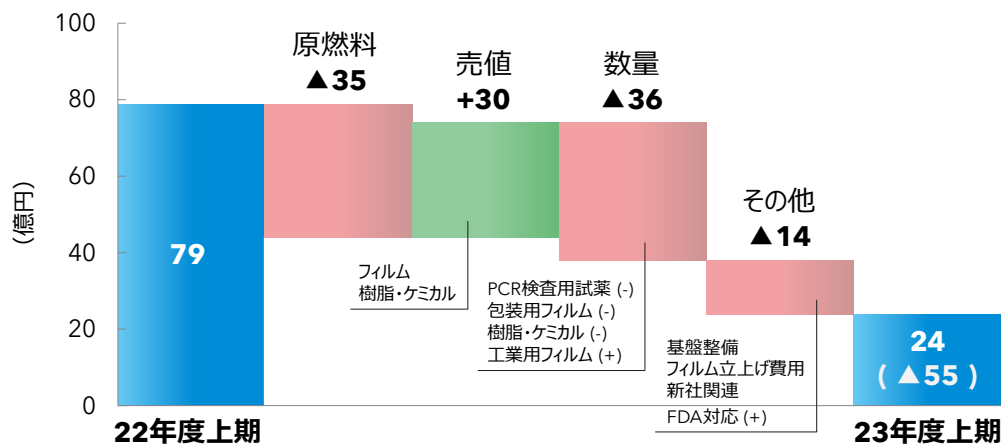
	22年度		23年度	増減	
	上期	下期	上期	金額	率
売上高	2,011	1,988	<b>1,994</b>	▲ 17	▲0.8%
売上総利益	452	398	<b>418</b>	▲ 34	▲7.6%
営業利益	79	22	<b>24</b>	▲ 55	▲70.1%
(率)	3.9%	1.1%	<b>1.2%</b>	-	-
経常利益	68	▲ 2	<b>10</b>	▲ 57	▲84.7%
特別損益	81	▲ 141	<b>20</b>	▲ 60	▲74.6%
親会社株主に帰属する四半期純利益	110	▲ 116	<b>20</b>	▲ 90	▲81.7%
EBITDA* <small>* 営業利益 + 減価償却費 (のれんを含む)</small>	175	116	<b>118</b>	▲ 57	▲32.8%
EPS (円)	123.4	▲ 130.8	<b>22.8</b>	-	-
ROE* <small>* 23年度上期は年換算ベース。 (四半期純利益×2)÷期首・期末平均自己資本</small>	-	-	<b>2.1%</b>	-	-
営業CF	122	▲ 44	<b>101</b>	▲ 21	-
減価償却費	96	94	<b>94</b>	▲ 2	▲2.3%
設備投資	175	253	<b>300</b>	+125	+71.5%
研究開発費	72	69	<b>77</b>	+5	+6.9%

5

決算サマリー、PLでございます。

売上高と営業利益については、先ほど申し上げた通りです。売上総利益につきまして、粗利率は21%となりました。販管費は、昨年度上期対比で21億円の増加となり、事業拡大のための費用が主になります。ここには販売試験費、東洋紡エムシー(株)設立の費用が含まれます。他に、基盤整備の費用も発生しました。設備投資については、「つくりかえる・仕込む」2025中期経営計画での積極投資案件の実行が、営業キャッシュ・フローを上回る形で進みました。

# 営業利益の増減要因



	21年度		22年度				23年度	
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q
為替レート (円/US\$)	114	116	130	138	141	132	137	145
国産ナフサ (千円/kl)	61	66	86	81	72	67	67	64

営業利益の増減要因分析です。

原燃料因が▲35億円と大きく、このうち、燃料因が▲39億円、原料因が+4億円となりました。それに対して、価格の見直しをお願いを進めてまいりましたので、売値因としては+30億円が実現いたしました。主には、フィルム、樹脂・ケミカル、不織布マテリアルなどです。このようにスプレッドはなんとか改善をはかりましたが、数量については、PCR検査用試薬や包装用フィルムの落ち込みが大きく、増益要素もあったものの、全体としては▲36億円の減益因となりました。

## 決算サマリー | BS

TOYOBO

	(B)		(A)	(億円)
	22/3末	23/3末	23/9末	増減(A)-(B)
総資産	5,178	5,889	<b>5,772</b>	▲ 117
現預金	272	607	<b>299</b>	▲ 308
棚卸資産	960	1,219	<b>1,275</b>	+56
有形固定資産	2,276	2,402	<b>2,618</b>	+216
純資産	1,971	2,214	<b>2,218</b>	+4
自己資本	1,949	1,896	<b>1,903</b>	+7
うち利益剰余金	747	705	<b>690</b>	▲ 15
非支配株主持分	23	318	<b>315</b>	▲ 4
有利子負債	1,912	2,294	<b>2,196</b>	▲ 98
D/E レシオ	0.98	1.21	<b>1.15</b>	-
Net Debt / EBITDA倍率*	3.4	5.8	<b>8.1</b>	-

\* (有利子負債 - 現預金) <期末> / EBITDA <年換算>

7

BSでございます。

現預金につきまして、2023年3月末時点では、東洋紡エムシー(株)設立に伴う資本金の振り込みがあり607億円となりましたが、2023年9月末時点では299億円となりました。棚卸資産は、包装用フィルムの減産調整などを進めましたが、原燃料コスト上昇の影響を受け、減らすまでには至りませんでした。有形固定資産は、積極的な設備投資の実行に伴い増えました。財務指標は記載の通りです。

## 決算サマリー | セグメント別

TOYOBO

	売上高			営業利益				増減 (A)-(B)
	22年度		23年度	22年度		23年度		
	上期	下期*	上期	上期	下期*	上期		
フィルム	743	717	<b>781</b>	24	▲ 8	<b>14</b>	▲ 10	
ライフサイエンス	193	188	<b>166</b>	54	38	<b>24</b>	▲ 30	
環境・機能材	557	551	<b>525</b>	21	19	<b>4</b>	▲ 18	
機能繊維・商事	453	470	<b>457</b>	▲ 11	▲ 14	▲ <b>9</b>	+3	
不動産・その他	64	62	<b>66</b>	10	12	<b>14</b>	+4	
消去・全社	-	-	-	▲ 19	▲ 25	▲ <b>24</b>	▲ 4	
合計	2,011	1,988	<b>1,994</b>	79	22	<b>24</b>	▲ 55	

\*新セグメントでの22年度下期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

8

セグメント別の動きをご説明いたします。

まず売上高ですが、昨年度対比で、フィルムは、価格の見直しを進めたほか、工業用フィルムが好調でした。一方、ライフサイエンスでは、PCR検査用試薬が落ち込みました。環境・機能材では、環境ソリューションで昨年度上期に大型案件の出荷があったものがなくなった影響がありました。

営業利益につきましては、昨年度対比で、ライフサイエンスでは、生化学診断用原料酵素の輸出による挽回はあったものの、PCR検査用試薬が大きく落ち込んだ影響を受けました。フィルムは、液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”が好調でしたが、減益となりました。環境・機能材は、不織布マテリアルや樹脂・ケミカルが落ち込みました。一方、昨年度下期と比較いたしますと、フィルムは黒字に転じており、回復基調にあります。



## (参考) 四半期別営業利益推移 (セグメント別)

TOYOBO

(億円)

	22 年度				23 年度	
	1Q	2Q	3Q*	4Q*	1Q	2Q
フィルム	25	▲ 0	▲ 4	▲ 4	12	2
ライフサイエンス	21	33	26	12	14	10
環境・機能材	9	12	8	11	▲ 7	10
機能繊維・商事	▲ 4	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 1
不動産・その他	3	6	7	5	4	10
消去・全社	▲ 9	▲ 11	▲ 13	▲ 13	▲ 17	▲ 7
合計	46	33	17	5	▲ 1	24

\*新セグメントでの22年度3Q~4Q実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

9

四半期単位での推移をお示しいたします。フィルムは回復基調と申し上げましたが、2023年度2Qは、1Qとの比較では減益です。大きな要因は、新機台の立ち上げに伴う、減価償却費を含む販売試験費の増加です。ライフサイエンスも減益であり、PCR検査用試薬の落ち込みが更に進みました。環境・機能材は、1Qは新社立ち上げの費用を計上したことによる押し下げがあり、2Qは、エンプラなど樹脂・ケミカルが回復しました。

(億円)

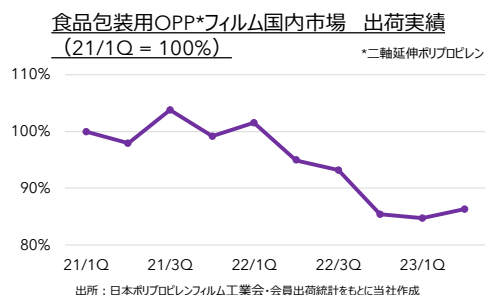
	22年度			23年度			増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	392	352	743	390	391	781	+37	+5.0%
営業利益	25	▲0	24	12	2	14	▲10	▲41.0%
(率)	6.3%	-	3.3%	3.2%	0.5%	1.8%	-	-

**包装用フィルム**

- 価格改定を進めるも、流通在庫調整影響による数量減に加え、新機台の立上げ費用が続く

**工業用フィルム**

- 液晶偏光子保護フィルムは、中国向けを中心に数量増
- セラミックコンデンサ用離型フィルムは、需要回復に遅れ



以降はセグメント別に内容を説明いたします。

包装用フィルムにつきまして、こちらに食品包装用OPPフィルムの国内市場における業界出荷実績のグラフをお示しいたします。1Qの昨年度対比での比較では、十数ポイントの減少となっております。当社の数量はそこまで落ち込んでいませんが、冒頭で申し上げた通り、業界、市場の在庫調整に時間がかかり、影響を受けました。足元ではようやく調整が終わり、荷動きが回復してきていることを確認しています。

また、包装用フィルムでは、新機台の立ち上げ費用も発生いたしました。モノマテリアル化による環境負荷の低減に貢献する、超高剛性ポリプロピレンフィルムの生産性向上に時間を要しております。工業用フィルムでは、液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”が好調で、ディスプレイ業界は非常に厳しいと聞き及んでおりますが、シェアは、昨年度ご説明しておりました50%超から、更に上がったと認識しております。しかしながら、セラミックコンデンサ用離型フィルムは、上期中の回復は厳しいという当初想定通りでした。足元ではようやく在庫調整が進展し、できる限り早急な回復を期待しておりますが、現時点では4Qに回復を織り込んでおります。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	87	106	193	81	84	166	▲ 27	▲ 14.2%
営業利益	21	33	54	14	10	24	▲ 30	▲ 55.7%
(率)	24.6%	30.9%	28.0%	16.6%	12.4%	14.5%	-	-

**バイオ**

- 新型コロナウイルス感染症向けPCR検査用試薬が大幅に減少
- 生化学診断薬用原料酵素は、国内外で出荷堅調

**メディカル**

- 人工腎臓用中空糸膜の販売が堅調

**医薬**

- FDAより Warning Letter の解除（2023年7月）を受け、収益改善

ライフサイエンスにつきましては、減益要因の大半はPCR検査用試薬です。生化学診断用原料酵素は伸長し、人工腎臓用中空糸膜も堅調で、減益を補う形となりました。また、医薬は、FDAからのWarning Letterが7月に解除されました。今後はFDA対応に要していた費用が減り、また、解除を受けて新規案件の受託が増えることで、下期は改善を進めてまいります。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	279	278	557	250	276	525	▲ 32	▲ 5.8%
営業利益	9	12	21	▲ 7	10	4	▲ 18	▲ 82.6%
(率)	3.3%	4.3%	3.8%	-	3.7%	0.7%	-	-

**樹脂・ケミカル**

- エンジニアリングプラスチックは、国内の自動車生産の回復により出荷増
- 工業用接着剤“バイロン”は、中国向けの電子部品関連の落ち込み影響あり

**環境・ファイバー**

- 環境ソリューションは、期ズレにより売上減少も、LIBS\*製造工程用のVOC回収装置が受注堅調
- 高機能ファイバーは、“ツヌーガ”の耐切創手袋用途の販売回復に遅れ
- 不織布マテリアルは、原燃料価格高騰の影響あり。衛材・土木向けの数量減

\*リチウムイオン電池セパレータ

環境・機能材は、大半が東洋紡エムシー(株)の業績が反映されたセグメントです。

いくつかの事業の中でも、エンジニアリングプラスチックが好調に推移し、ようやく回復を確認することができました。

環境ソリューションは、リチウムイオン電池セパレータ製造工程用のVOC回収装置の受注が非常に堅調でしたが、期ズレの影響により、昨年度上期対比では減少いたしました。

工業用接着剤“バイロン”は、このセグメントの中でも苦戦した事業です。中国向けの電子部品関連は、これまで堅調でしたが、今期は落ち込み、また、回復に時間を要すると見込んでおります。

高機能ファイバーは、特に欧州向けの耐切創手袋用途の販売回復が遅れています。

最も苦戦したのは不織布マテリアルでした。業界の競争が激しくなったことに伴い、なかなか価格が通らず、価格が通った場合には数量を落としました。この事業には、今後対策を打っていくことを考えております。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	1Q	2Q	上期	1Q	2Q	上期	金額	率
売上高	222	232	453	222	235	457	+3	+0.7%
営業利益	▲ 4	▲ 7	▲ 11	▲ 7	▲ 1	▲ 9	+3	-
(率)	-	-	-	-	-	-	-	-

**衣料繊維**

- 不採算商品の見直しと製品価格の改定が進み収益が改善
- 富山事業所の拠点集約が進捗

**エアバッグ用基布**

- 数量回復と製品価格の改定、販売条件の見直しが進み、赤字縮小

13

機能繊維・商事につきまして、衣料繊維では、東洋紡せんいという新会社をつくりました。不採算商品の見直し、製品価格の改定を進めました結果、赤字が解消し、この上期に黒字化の目途が付きました。また、富山にあります3つの工場を今年度中に1つに集約する取組みも、順調です。

エアバッグ用基布は、大きな赤字を抱えておりましたが、数量が回復し、また、製品価格の改定、販売条件の見直しが進んだ結果、赤字は残ってはいるものの、縮小に向かいました。

## 2023年度 業績見通し

TOYOBO

フィルムの緩やかな需要回復、原燃料価格の高止まり影響を踏まえ、営業利益を 100億円に下方修正。当期純利益は 10億円を予想。配当は据え置きを予定

(億円)

	22年度		23年度		増減		直近予想 (23/08)
	実績	上期	下期	見通し	金額	率	
売上高	3,999	1,994	2,106	<b>4,100</b>	+101	+2.5%	4,300
営業利益	101	24	76	<b>100</b>	▲ 1	▲0.6%	150
(率)	2.5%	1.2%	3.6%	<b>2.4%</b>	-	-	3.5%
経常利益	66	10	50	<b>60</b>	▲ 6	▲9.0%	110
特別損益	▲ 60	20	▲ 34	▲ <b>14</b>	+46	-	▲ 20
親会社株主に帰属する当期純利益	▲ 7	20	▲ 10	<b>10</b>	+17	-	40
EBITDA	291	118	182	<b>300</b>	+9	+3.0%	360
EPS (円)	▲ 7.4	22.8	▲ 11.5	<b>11.4</b>	-	-	45.0
減価償却費	190	94	106	<b>200</b>	+10	+5.0%	210
設備投資	427	300	260	<b>560</b>	+133	+31.0%	500
研究開発費	141	77	83	<b>160</b>	+19	+13.4%	160

14

以上を踏まえて、2023年度の見通しとなります。

冒頭に申し上げました通り、フィルム事業は、ようやく回復基調となっておりますが、そのテンポが緩やかであること、また、原燃料価格の高止まりによる影響が下期にも残ることを織り込んでおります。設備投資につきましては、2024年度上期中までは、高水準な状態が続くと想定しております。

## セグメント別見通し

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益			直近予想 (23/8)
	22年度 実績*	23年度 見通し	22年度 実績*	23年度 見通し	増減	
フィルム	1,461	<b>1,550</b>	16	<b>55</b>	+39	88
ライフサイエンス	381	<b>340</b>	92	<b>47</b>	▲45	52
環境・機能材	1,108	<b>1,150</b>	40	<b>30</b>	▲10	58
機能繊維・商事	924	<b>930</b>	▲25	<b>▲12</b>	+13	▲15
不動産・その他	126	<b>130</b>	22	<b>25</b>	+3	22
消去・全社	-	-	▲45	<b>▲45</b>	▲0	▲55
合計	3,999	<b>4,100</b>	101	<b>100</b>	▲1	150

\*新セグメントでの22年度通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

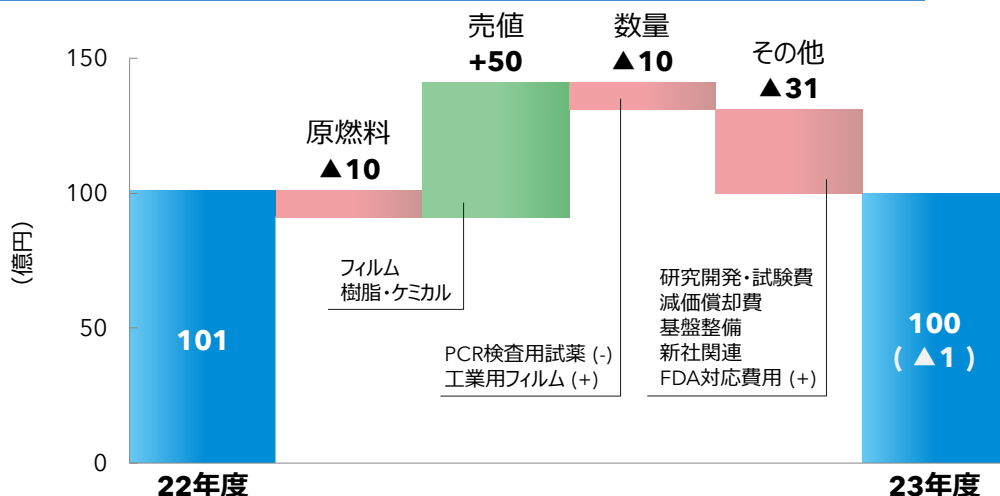
15

セグメント別の見通しです。2023年度下期の事業環境の見通しを補足25ページにお示ししておりますので、ご参照ください。

セグメント別のご説明をいたしました際に下期のニュアンスもお伝えいたしました。包装用フィルムは緩やかな回復、セラミックコンデンサ用離型フィルムは4Q以降の回復を想定しております。

# 営業利益の増減要因

TOYOBO



	22年度	23年度	直近予想 (23/8)
為替レート (円/US\$)	135	145	138
国産ナフサ (千円/kl)	77	70	61

16

営業利益の増減要因分析です。原燃料因は▲10億円と見通しております。原料価格は昨年度対比で下落するため、原料因は約+40億円、一方で燃料部分は約▲50億円という内訳です。

燃料因に関しまして、足元の石炭価格が落ち着いているのになぜなのか、という点について、補足26ページをご参照ください。石炭価格は2022年度上期に上昇しておりますが、当社の調達契約は半年単位であるため、在庫の払い出しベースでは、この下期まで影響が残ることになります。

増減分析に戻りまして、売値因は+50億円と見通しております。燃料価格の上昇分の価格転嫁はまだ十分にできていない部分もございますが、上期中に合意した売値見直しの効果が、フィルムや樹脂・ケミカルで出てくることを織り込んでおります。数量因は、PCR検査用試薬の落ち込みがありますが、工業用フィルムの回復を想定しております。



## 未来をつくるため稼ぐ力を取り戻す

### 1. 安全・防災・品質、コンプライアンスの徹底

### 2. 稼ぐ力を取り戻す

- ①価格改定：価値に見合った価格へ。供給責任を果たすため。未来をつくるため
- ②コストダウン：製造・調達・物流、販管費の絞り込み
- ③キャッシュフロー改善：在庫圧縮、設備投資の絞り込み、投資効果の発現
- ④要改善事業への対策・取組み

### 3. 中計4つの施策の実行

- ①安全・防災・品質の徹底
- ②事業ポートフォリオの組替え（要改善事業の対策、東洋紡エムシー株式会社の立上げ）
- ③未来への仕込み
- ④土台の再構築

今年5月に説明しました経営方針の進捗についてご説明いたします。

まず、安全・防災・品質、コンプライアンスの徹底を何よりも最優先で進めております。それがあっての、稼ぐ力を取り戻す取り組みです。営業利益のベースラインは、私といたしましては最低でも200億円にまで戻さなければ、成長投資ができないという危機感を持っております。

200億円に向けたポイントが4つ、価格改定、コストダウン、キャッシュ・フロー改善、要改善事業への対策・取組みです。それぞれに進捗しておりますが、まだ数字には現れておらず、結果につなげていかなければいけません。

中期経営計画の4つの施策の実行の中で、未来への仕込み、土台の再構築という点で、設備投資を積極的に実施しているため、キャッシュ・フローが落ち込んでいる中では非常に厳しくありますが、意思決定したものはやり遂げるといことで進めております。

主な設備投資については補足27ページにお付けしていますので、ご覧いただければと思います。

## 事業別 主なアクション（進捗確認）

TOYOBO

セグメント	アクション（2023年5月時点での計画）	進捗*
フィルム	<b>■収益の柱。収益回復</b> ・包装用フィルム：一層の価格改定によるマージン改善。新ライン・新製品の本格立ち上げ ・セラコン用離型フィルム：市況回復に合わせ、顧客の増産体制に対応。 <b>新ライン建設</b> ・液晶偏光子保護フィルム：顧客の増産体制に対応。価格改定	▲ ○ ○
ライフサイエンス	<b>■ポストコロナ収益減の挽回と成長策実行</b> ・バイオ：PCR検査用試薬は売上減少も、海外向け原料酵素拡販。 <b>リニューアル増産投資</b> ・メディカル：人工腎臓用中空糸膜は、 <b>需要増への対応と一貫生産工場建設</b> 急性血液浄化市場、抗体医薬製造プロセス市場へ上市・新商品投入 ・医薬品製造受託： <b>FDA・WL対応・GMP体制</b> 。販売回復と収益改善	○ ○ ▲ ○
環境・機能材	<b>■東洋紡エムシー：立ち上げ（機能別組織他）。変革プランの実行</b> ・環境ソリューション： <b>LIBS向けVOC回収装置の海外加速</b> 。FO・BC膜の新用途立ち上げ ・工業用接着剤：一層の価格改定と数量回復。エレクトロニクス向けの新製品開発 ・エンジニアリングプラスチック：品質保証体制の確立。一層の価格改定と数量回復	○ ▲ ▲
機能繊維・商事	<b>■要改善事業の対策実行</b> ・エアバッグ用基布：収益改善の為に一層の価格改定を実施。 <b>新原糸工場（タイ）の商業生産開始</b> ・衣料繊維：3工場の集約と海外拠点一体での事業運営による <b>収益回復</b>	○ ○ ○

\* ○：計画通り、▲：遅れ

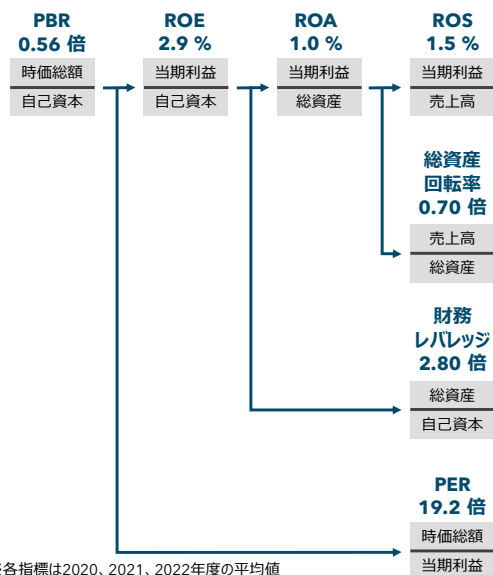
18

主なアクションの進捗をお示しいたします。▲は、やや遅れがあるアクションとなります。

包装用フィルムは、収益性の改善は進んでおりますが、数量が伸びていないことに加え、新機台の立ち上げ費用があり、当初計画に比べ遅れていると認識しております。

メディカル関係では、人工腎臓用中空糸膜は予定通りに出荷が堅調で、工場の建設も進んでおりますが、新製品の市場投入が遅れております。

環境・機能材では、東洋紡エムシー(株)をこの4月に立ち上げて以降、さまざまな変革プランを進めております。機能別の組織にすることで、縦割りであった事業の間に横串を指す取組みが、徐々に進んでおります。その中に中国向けの落ち込みで打たれている工業用接着剤がありますが、エレクトロニクス向けの新製品開発がやや遅れていると認識しております。エンジニアリングプラスチックは、品質保証体制の構築、ISO認証の再取得に時間を要しており、これらをなんとしてもやり遂げてまいります。



※各指標は2020、2021、2022年度の平均値

**事業ポートフォリオの組替え**

① 稼ぐ力の向上  
② 資産効率の向上

**資本コストを上回る資本収益性の達成**  
**ROE ≥ 9.0% ROIC ≥ 7.0%**  
 (2030年度目標)

**PBR向上**

資本コストや株価を意識した経営の実現、という点につきまして、弊社のPBRが1倍を大きく割り込んでいることに対して、どういう姿勢で臨むかをお示しいたします。

一言で言えば、2025中期経営計画で掲げる事業ポートフォリオ改革をやり遂げることに尽きるかと思えます。強いものを伸ばして、課題のあるものの使用資本を落とすということです。

結果として、稼ぐ力を向上させる、それから、積極投資の効果を発現させることで、資産効率を上げ、PBRを上げていきたいと考えています。

事業環境の変化、および今期業績予想の下方修正を踏まえ、  
2025中期経営計画の見直しを進めています。  
(2024年5月を目途に公表予定)

最後に、**2025**中期経営計画につきまして、足元の業績が当初計画に比べて大きく落ち込んでいること、事業環境が大きく変化していることを踏まえまして、目標、設備投資の内容を含めて、見直しを進めております。**2024**年5月を目途に、あらためて、ご説明をさせていただきます。

私からの説明は以上になります。ありがとうございます。

本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved

**TOYOBO**  
Beyond Horizons

© TOYOBO CO., LTD. All rights reserved.

補足

# セグメント別情報

TOYOBO

売上高	(億円)					22 年度		23 年度	
	1Q	2Q	3Q*	4Q*	通期*	1Q	2Q		
	フィルム	392	352	356	361	1,461	390	391	
ライフサイエンス	87	106	100	88	381	81	84		
環境・機能材	279	278	267	283	1,108	250	276		
機能繊維・商事	222	232	223	248	924	222	235		
不動産・その他	31	33	30	32	126	28	38		
消去・全社	-	-	-	-	-	-	-		
合計	1,010	1,001	976	1,012	3,999	971	1,024		

営業利益	(億円)					22 年度		23 年度	
	1Q	2Q	3Q*	4Q*	通期*	1Q	2Q		
	フィルム	25	▲ 0	▲ 4	▲ 4	16	12	2	
ライフサイエンス	21	33	26	12	92	14	10		
環境・機能材	9	12	8	11	40	▲ 7	10		
機能繊維・商事	▲ 4	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 25	▲ 7	▲ 1		
不動産・その他	3	6	7	5	22	4	10		
消去・全社	▲ 9	▲ 11	▲ 13	▲ 13	▲ 45	▲ 17	▲ 7		
合計	46	33	17	5	101	▲ 1	24		

\*新セグメントでの22年度3Q、4Qおよび通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。



## 23年度の事業環境（下期見通し）

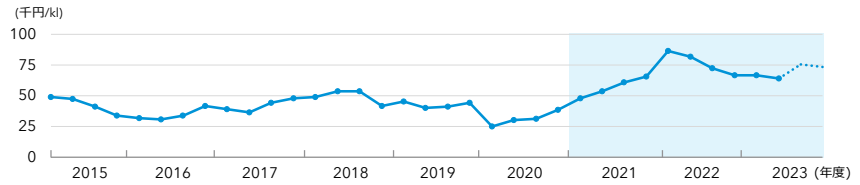
TOYOBO

セグメント	事業	現状（23年度上期）	見通し（23年度下期）
フィルム	包装用	在庫調整の長期化で需要回復遅れ	在庫調整終え、緩やかに回復へ
	工業用	液晶偏光子保護フィルムは中国向けの出荷堅調	需要堅調も出荷は一服
		MLCCはサプライチェーン全体での在庫調整	本格回復は4Q以降
ライフサイエンス	バイオ	PCR検査用試薬は5類感染症移行により需要激減	PCRは需要減
	メディカル	人工腎臓用中空糸膜は堅調に推移	堅調に推移
環境・機能材	樹脂・ケミカル	自動車生産台数は回復	堅調に推移
		電子材料用途（中国・アジア）の需要回復遅れ	緩やかな回復
	環境・ファイバー	VOC回収装置は受注堅調	需要堅調
		不織布マテリアルは事業環境の競争激化（衛材、土木）	厳しい競争環境継続
機能繊維・商事	エアバッグ	自動車生産台数は回復	堅調に推移
共通		原燃料価格高騰の影響あり	高止まりの影響あり

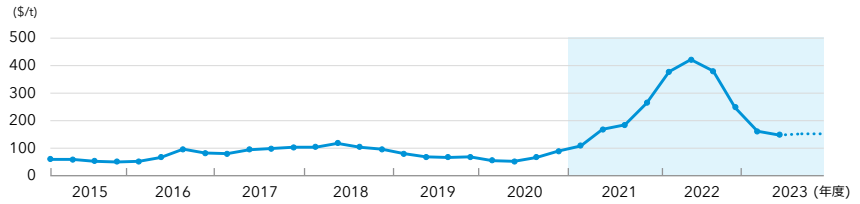
# 原燃料価格高騰に対する価格改定

TOYOBO

## ■ 国産ナフサ価格



## ■ 石炭価格 (豪州一般炭市況価格)



## ■ 当社「原燃料」「売値」影響 (前年度比増減)

※2023年度3Q、4Qは当社推定 (億円)

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
原燃料 (A)	+71	+41	▲ 37	▲ 45	+29	+56	▲ 112	▲ 170	▲ 10
売値 (B)	▲ 61	▲ 25	+16	+12	▲ 5	▲ 38	+47	+119	+50
スプレッド (A+B)	+10	+16	▲ 21	▲ 33	+24	+18	▲ 65	▲ 51	+40

# 主な設備投資

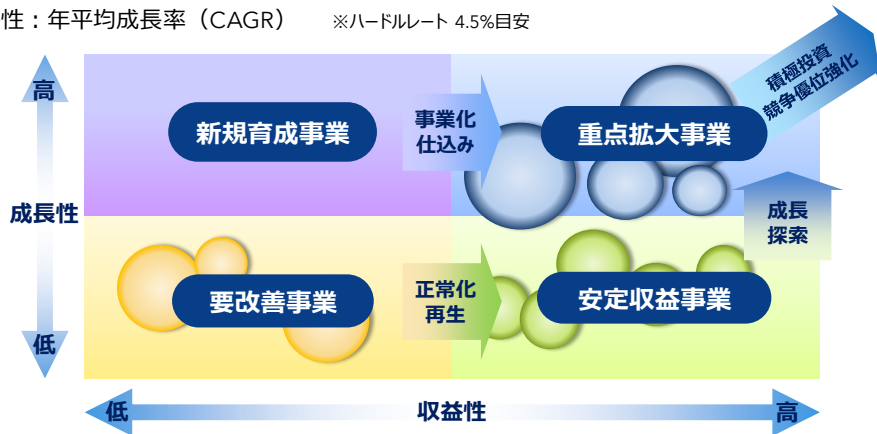
TOYOBO

セグメント	内容	投資金額 (億円、概数)	稼働開始
フィルム	・セラコン用離型フィルム 加工設備2号機（敦賀）	60 <sup>*1</sup>	2022年下期 <sup>*2</sup>
	・OPPフィルム 生産設備（犬山）	70	2023年上期 <sup>*2</sup>
	・セラコン用離型フィルム 製造設備（宇都宮）	200	2024年下期
ライフサイエンス	・生化学診断薬用原料酵素 製造設備（敦賀）	70	2024年上期
	・PCR検査試薬・遺伝子診断薬用原料 製造設備（敦賀）	65	2024年下期
	・人工腎臓用中空糸膜 一貫生産工場（秋田）	50	2024年上期
	・メディカル研究棟（大津）	20	2023年下期
環境・機能材	・高機能樹脂 製造設備（高砂）	80 <sup>*3</sup>	2023年下期
	・高機能樹脂 製造設備（岩国）		2024年下期
機能繊維・商事	・エアバッグ用ナイロン原糸 生産工場（タイ）	100 <sup>*3</sup>	2023年下期 <sup>*2</sup>
共通	・自家火力発電所リニューアル（岩国）	90	2023年下期
	・総合研究所 パイロットプラント棟	20	2023年上期
	・DX/IT基盤整備（脱ホスト、ネットワーク・セキュリティほか）	80 <sup>*4</sup>	順次

\*1：1号機との合算金額 \*2：量産開始時期 \*3：合併会社の総投資額 \*4：中計期間中の総投資額

「収益性」「成長性」の2軸で各事業を4象限に評価・層別

- 収益性：使用資本利益率（ROCE） = 営業利益 ÷ 使用資本 ※ハードルレート 6.5%目安
- 成長性：年平均成長率（CAGR） ※ハードルレート 4.5%目安



・ハードルレートだけでなく、定性情報も含めて、「安定収益事業」か「要改善事業」かを見極める。  
 ・当社グループ全体の資本効率性指標はROIC、各事業の管理指標はROCE

**東洋紡グループ統合報告書「TOYOBO REPORT 2023」を公開****主な内容**

- 長期ビジョン「サステナブル・ビジョン2030」、「2025中期経営計画（2022～2025年度）」
- CEOメッセージ
- イノベーション創出ビジョン
- 事業別概況、CSV事例、特集「東洋紡エムシー始動」
- TCFDに基づく開示 など

**ダウンロードURL**

日本語版：<https://ir.toyobo.co.jp/ja/ir/library/integrated.html>

英語版：<https://ir.toyobo.co.jp/en/ir/library/integrated.html>（11月公開予定）



### 「ポジティブ・インパクト・ファイナンス」の融資契約を締結

- 企業活動が環境・社会・経済に及ぼすインパクトを包括的に分析・評価し、当該活動の継続的な支援を目的とした融資
- 2022年5月に策定した「サステナブル・ビジョン2030」で掲げた目標と、その目標達成に向けた取組みが、社会課題の解決に貢献できることを外部評価機関により評価された
- 本評価については、SDGs達成に対しインパクトを与えるテーマについて、外部評価機関より定性的・定量的に分析・評価され、また評価にかかる手続きのポジティブ・インパクト金融原則への準拠性、活用した評価指標の合理性について第三者意見を取得